

復活節第2主日礼拝説教「見たら信じる、見なくても信じる」
日本基督教団石神井教会 2020年4月19日

【使徒書日課】ペトロの手紙一 1章3～9節

³わたしたちの主イエス・キリストの父である神が、ほめたたえられますように。神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え、⁴また、あなたがたのために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しばまない財産を受け継ぐ者としてくださいました。⁵あなたがたは、終わりの時に現されるように準備されている救いを受けるために、神の力により、信仰によって守られています。⁶それゆえ、あなたがたは、心から喜んでいるのです。今しばらくの間、いろいろな試練に悩まねばならないかもしれませんが、⁷あなたがたの信仰は、その試練によって本物と証明され、火で精錬されながらも朽ちるほかない金よりはるかに尊くて、イエス・キリストが現れるときには、称賛と光栄と誉れとをもたりますのです。⁸あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。⁹それは、あなたがたが信仰の実りとして魂の救いを受けているからです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 20章19～31節

¹⁹その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。²⁰そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。²¹イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」²²そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。²³たれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。たれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

²⁴十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。²⁵そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うので、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」²⁶さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。²⁷それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」²⁸トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。²⁹イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」

³⁰このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさったが、それはこの書物に書かれていない。³¹これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。

弟子たちは家の戸に鍵をかけて…

今日の教会暦は「復活節第2主日」、主のご復活を祝った「イースター」に続く日曜日です。先週、それぞれのご自宅で「イースター」を祝われた皆さんは、どのような一週間を過ごされたのでしょうか。古い時代の教会では、「イースター」の祝いの中で洗礼を受けた新しい信者は、それから一週間、洗礼式の際に着せられた真新しい白い衣を身に着けて、共に教会で過ごしたのだそうです。そのようにして迎えた最初の日曜日は、どんなにか感慨深いものだったのではないかと想像させられます。その日曜日には、まだキリスト信者として新しく生まれて一週間の者たちを前に、「ペトロの手紙一」の御言葉を告げるのが、教会の慣わしになっていったようです。

「あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。」

そのときには、使徒ペトロがそのように告げていく勧めの言葉を、すでに洗礼を受けて何年も経った者たちも、あらためて心に刻み直したことでしょう。現代の教会に生きるわたしたちも、たとえ「イースター」に新しく洗礼を受けた者が誕生しなかったとしても、わたしたち自身の信仰の原点に立ち返らせる勧めとして、聞き直したいと思うのです。

先週に続いて、この礼拝堂には、限られた奉仕者しかおりません。皆さんにここにお集まりいただくことを避けなければいけないときが、もうしばらく続くでしょう。皆さんには、それぞれの家に留まっています。それでも、インターネットを用いた「ライブ配信礼拝」という形で、かなりの皆さんと同じ時刻に同じ礼拝を共有することができるというのは、驚きです。

けれども、このような礼拝が成り立つというのも、これまで皆さんがこの礼拝堂に日曜日ごとに集っては礼拝にあずかり続けてくださっていたという事実があったからこそのことなのでしょう。「ライブ配信」で礼拝に参加してくださる方がいくら大勢いらっしゃったとしても、それが、一度も会ったことのない、互いに顔を見たこともないような人たちばかりだったとしたら、わたしは、ほとんど誰もいないこの礼拝堂で、カメラに向かって、どのように礼拝を整え、説教を語ればよいか、分からなくなってしまおうでしょう。

「イースター」の朝、主イエスの御体が見当たらなくなった空っぽの墓を見て愕然とした女の弟子、マグダラのマリアは、墓の中の御体が置かれていたはずのところにいる二人の天使の姿を見つめながら、泣いていました。けれども、振り返って墓の外に目を遣ったとき、主イエスのお姿を見つけました。初めは分かりませんでした。分ったのです。ずっと見てきたお方の姿だったからです。すぐに、男の弟子たちのところに行って、「わたしは主を見ました」(20:18)と告げました。彼らは、もちろん、すぐには信じませんでした。自分の目で見なければ、信じられなかったでしょう。ただ、彼らは、家に閉じこもっていました。そこで、マリアの告げたことを、互いに議論しては思い巡らしていたのです。ちょうど、今ご自宅にいる皆さんのように、です。

「あなたがたに平和があるように」

弟子たちは、家に閉じこもっていました。戸に鍵をかけていたと、わざわざ伝えられています。それは、ユダヤ人を恐れてのことだった、と言うのです。弟子たちにとってユダヤ人は、身の危険を感じさせるほどの脅威だったのでしょうか。確かに、主イエスを十字架刑にまで追いやった人々です。けれども、彼ら自身には人を死刑にする権限がありません（18:31）でしたし、裏社会で生きているような人を雇って人を抹殺するほどのことができる人々でもなかったようです。むしろ彼らは、世論を煽ることで権力者を動かすような人々、否むしろ、深く考えもせず誰かに煽られて世論を形成し権力者を動かしてしまうような人々だったのではないのでしょうか。だからこそ、弟子たちは、そのようなユダヤ人を恐れたのでしょう。彼らは、理屈や理性で語って分かってくれるような相手ではない、と思われたからです。

今、わたしたちが、それぞれの家に留まっているのは、政府や行政からそう呼びかけられ、それが今は必要なことだと納得しているからかもしれません。このようにときに不要不急の外出を続ける人を見ると、理性的ではないとさえみなすでしょう。しかし、実のところ本当はどうなのかとすることがあります。わたしたちが今、それぞれの家に留まり、教会も「集まり」を自粛しているのは、実のところ「恐ろしい」からかもしれません。ウイルスが恐ろしい、感染症が恐ろしい。それもあるでしょう。けれども、それだけでなく、「周囲の目」を恐れているところも、あるのではないのでしょうか。

実際、教会は、掲示板や玄関に、「今は集まりとなることを休止しています」、「礼拝はインターネットでライブ配信しています」と、外向けに大きく貼り出したりしているのです。皆さんも、日曜日に今まで通り教会に行つて礼拝に参加しようとされたら、きっと、ご家族や近所の方に釘を刺されるでしょう、「やめなさい」と。

主イエスに「恐れるな」と告げられても、わたしたちからさまざまな「恐れ」がまったく取り去られることはないのです。ヨハネ福音書の伝える弟子たちの姿は、いつでも「恐れ」に取りつかれていて、決して堂々としたものではなかったことを示しています。けれども、そのような弟子たちの真ん中に主イエスがおいでくださった、というのです。「あなたがたに平和があるように」と告げてくださった、というのです。

今ここで、バラバラのところに置かれている教会の皆さんに、必ずやご復活の主イエスはお告げくださっているでしょう、「共に会堂に集まることを恐れている教会よ、あなたがたに平和があるように」と。それは、恐れ of the 思いに取りつかれているわたしたちに精神的な平安を約束してくださっている、というだけのことでは決してないと思います。むしろ、「恐れ」を抱えながらもなお歩き始めることになる、新しい希望への約束の告知なのではないのでしょうか。「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない」（14:27）とおっしゃられているのです。

「わたしたちは主を見た」

主イエスの平和の告知は、わたしたちを新しいところへと遣わされる告知と一つです。「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」。その御言葉を、弟子たちは、自らも主のお姿を見る者となることを通して、受けとめたのです。「わたしたちは主を見た」と、仲間に、周囲の人々に、語ることのできる者として、主の平和の告知に押し出されて、新しいところへ、赦しによって実現する和解に生きる世界へと、歩み出したのです。

ただし、彼らが見た主イエスは完全無欠の聖人君子ではなかった、と言ったら、皆さんに叱られるでしょうか。けれども、弟子たちは、そうではない主イエスの姿をこそ、留まっていた家の中で、自分たちの交わりの真ん中で、見たのです。

その主イエスは、弟子たちに、ご自身の**手とわき腹**をお見せになられました。それは、釘打たれた傷の痕、槍で刺された傷の痕です。傷を負われた主イエスのお姿をこそ、弟子たちは、そのとき見たのです。その日、そこに一緒におらなかったトマスという弟子も、結局、次の日曜日に、今度は他の弟子たちと一緒にいる中で、その傷を負われた主イエスのお姿を、見ることになりました。

誤解を恐れずに言えば、主イエスがご自身の手とわき腹の傷を弟子たちにお見せになられたというのは、本当に十字架につけられた体をそのまま持って蘇らされたのだというようなことを証明するためではなかったでしょう。それは、今や主イエスが、残された弟子たちと一つになられている、ということをお示しになられたことだったのではないのでしょうか。

死んで復活された主イエスとは、傷のある、欠けのある姿の者のこと。復活した体とは、傷の深い、欠けの多い者の姿のこと。

主イエスが弟子たちをご自身と一つに結び付けてくださっているのだとしたら、それは、当然のことだったでしょう。十字架の出来事を通して、主イエスは今や、主イエスお一人ではなく、弟子たちと一つになられたのです。傷のある、欠けのある弟子たちと、一つになられたのです。傷深い、欠け多く、恐れからも逃れられない弟子たちは、自分たちの姿の中に、今や主イエスが一つになってくださることを、そのとき、見たのに違いないのです。

主イエスは、弟子たちをこの世にお遣わしになられます。世界が、赦しの営みによって新しくされるために、わたしたちをお遣わしになられます。傷ついた者と一つになってくださるお方は、この世界の傷深い人々、いいえ、傷深い世界そのものが、互いに赦し合い、赦され合う交わりとして新しい命を回復し、新しい平和の道を進むようになるために、わたしたちをお遣わしになられるのです。

それは、わたしたちには負いきれない重荷でしょうか。そのような課題を担うと教会が語るのは、大言壮語しすぎでしょうか。しかし、主は確かに、わたしたち傷深く、欠け多い教会と一つになってくださっているのです。しかも、たとえ教会の中に主のお姿を見ることなく、わたしたちの赦し合う歩みの先に始まる和解と平和の世界を信じてくれる人々が、いるのです。主は、そのような人々をも、「幸いである」と祝福してくださろうとしているのです。